

『芽むしり仔撃ち』論

——悪を獲得した「僕」——

小川 亜紀

大江健三郎の『芽むしり仔撃ち』（『群像』一九五八年六月号）は、戦中の感化院の子供たちが教官に率いられ、集団疎開のためある村にやって来、そこで繰り広げられる様々な出来事の中で成長する子供の物語である。

そこでの主語は、しばしば「僕ら」や「仲間」と語られ、「集団」という語も頻繁に用いられる。特に第一章の語りにおいて、このように語られている。

このことは、「僕」の存在が「僕ら」の集団を形成する一要素にすぎないことを表している。そして、このような言葉を頻用することで、「僕ら」の仲間意識を意図的に高めていると思われる。

子供たちが一番恐れるもの、それは孤独ではなからうか。子供の頃、居るはずの母親が家に居ない、あるいは、親と出かけたときに気がついたら親とはぐれて一人になっていた、そういったときに感じる孤独は、子供にとって何よりも恐ろしいものである。そんな子供たちが、感化院という全く他人の集まりの世界の中で暮らすことになったと

き、孤独から逃れるために本能的に仲間を形成し、精神の安定を図ることは自然であろう。そういった「僕」の気持ち、頻繁に用いる仲間を感じさせる言葉に込められていると思われる。子供たちの集団は羊の群れと同じである。一匹では寒さからも危険からも身を守ることができないため一緒に行動しているにすぎない。そこには愛情や友情によるつながりは存在しない。たとえ群れの一匹が狼に食べられようと悲しいとは思わず、たとえそう思っても草を食んでいる間に忘れてしまう、そんな仲間意識なのである。子供たちの中において「僕」は年長者であり、そのため「班長」になってはいるものの、ほかの感化院の子供たちと何の変わりもない一人の子供にすぎない。彼らと同じように考え、行動しているように思われる。

そんな仲間の一員であった「僕」が、最終章になるとたった一人で戦うことになる。「僕」は仲間から裏切られ、村長の怒りを買ひ、たった一人で村から追い出され、村人から追われるのである。

しかし僕には兇暴な村の人間たちから逃れ夜の森を走って自分に加えられる危害をさけるために、始めに何をすればよいかわからなかった。僕は自分に再び駆けはじめの力が残っているかどうかさえわからなかった。(第十章)

これは最終章の文章である。主語はもはや「僕ら」と語られることはない。「僕」は自ら危険から身を守る群れの中から離脱してしまったのである。

なぜ「僕」は安全な群れから飛び出し、このような危険で孤独な道を選んだのであろうか。それは、「僕」が村の中での様々な経験を通して成長したことで、他の子供たちとは違う新たな精神、すなわち悪の精神を持ち始めたことによるのである。それでは、「僕」がどのような経験をして成長していき最終章に至るのかを、順を追ってみたい。そして、主人公「僕」を通じて描かれているものから、この作品のテーマを考えていきたい。

「僕ら」の一人にすぎなかった「僕」の変化は「弟」の出現によって始まりを迎える。

父は、弟を疎開するための土地を探しあぐねて、そのあげく感化院の集団疎開に弟を便乗させることを考えついたというわけだった。僕は失望にうちひしがれた。それでも父が帰って行ったあとでは僕は弟と大きく抱きあったのだ。(第一章)

このようにして「僕」の仲間の中に、「弟」が入ってくることになる。最初の頃「弟」は「僕ら」感化院の仲間にとって異質な存在であった。他人を「見つめる眼」を持ち、周りの人々を見守り、観察する性質を持ち、最初は「弟以外の仲間たち」と表現され「僕ら」の一員としては認められていなかった存在であったが、すぐに仲間として認められることになる。

「弟」は「僕らの生活のなかへ水のように柔軟に入り込み、「緊密な連帯を造り」上げた「僕ら」子供たちの一員となる。「弟」が人の真似をして集団の中に入り込む行為は人間が持つ本能であると思われる。子供は周囲との違和感に敏感に反応し同化しようとする。それは集団の中で生き抜く人間の知恵であり、子供が持っている社会性である。このようにして、子供たちの集団もできたのである。この「弟」の出現で、「僕」は「僕ら」一員ではない「僕」という一人の存在として意識されるようになる。——「僕」をたった一人の「兄」として頼りに慕う「弟」。「弟」は「僕」にとって唯一の肉親であり、「僕」には何物にもかえがたい血縁のつながりを得ることになる。それまで他人の集まりであり、安心感を得るためだけのつながりであった「僕ら」の仲間意識の中に、更に深いつながりの仲間意識

を持つことになるのである。

更に、「弟」は感化院での生活が浅いため感化院の子供たちが持っていない子供らしい好奇心を備えた純真な心を持っている。それは「薔薇色に輝く頬、うるんだ虹彩の美しさ」と語られ、「僕」はそれを誇りに思っている。感化院の子供たちは暴力的なことや力の強さに誇りを感じることはあっても、無垢な美しさに感動したり誇りに感じたりすることはない。長年の感化院での虐げられた生活の中でそういったものに目を向けなくなっているのである。しかし、「僕」は「弟」を見て、感動や誇りに思う気持ちをただ一人取り戻している。そしてそのように思うとき、「僕ら」ではない「僕」が存在するのである。これが「僕ら」の中の一要素に過ぎなかった「僕」からただ一人の人間としての「僕」への出発となるのである。

その後、「僕ら」は疎開先の村に入り、次の日の朝、村での最初の作業をすることになる。それは、疫病のために死んだ大量の動物の死骸を地面に埋める作業であった。その際「僕」は唯一村人の一人の鍛冶屋と話し、疫病のことを聞きだすことに成功する。これは、「僕」が自分の意思を持ち始め、自ら進んで周囲に関心を持つようになったことを意味する。それは守るべき「弟」の存在がきっかけになっての行為であろう。そしてその翌日、村人たちは夜が明けると前に村から逃げ出す。それは、村に疫病が流行ったときの村の古くからの慣わしであった。しかし村には感化院の子供たちが取り残され、村から脱出するための唯一の道は、銃を持った村人たちに監視されていた。つまり、子供たちは村の中に幽閉されてしまったのだ。そして、「僕ら」以外にも村の中に閉じ込められた者がいた。それは朝鮮人部落に住み、父親を疫病で亡くした李少年であった。

彼と「僕」との出会い、村人の家から略奪した食料をめぐるの突然の喧嘩から始まる。その喧嘩の最後に次のような描写がある。

僕は敵の無防備の鳩尾を蹴りつけるために力をこめた足をおろし、弟をふりかえった。弟は街路樹の下まで後退し、腰に両手を支えて涙をいっぱいためた眼を見はり僕らを見つめていた。(第四章)

この時「弟」の目には「僕」と李少年の二人がうつつており、その二人を表す言葉に「僕ら」が用いられている。「僕ら」は仲間意識の象徴であり、この時点で「僕」にとって李少年は「敵」ではなく、二人の間には友情でつながった仲間意識が芽生え始めていたことがわかる。その後、李少年と「僕ら」は、それぞれの墓を作る（李少年は父親の墓を、「僕ら」は仲間の一人の子供と、村の少女の母親の墓をそれぞれ作った）という共同作業や、李少年が朝鮮人部落でかくまっていた脱走兵を見せ、秘密を打ち明け共有することを通じて仲間になっていくが、その前に二人で喧嘩をしたという行為が二人だけの共有の体験になり、また握りこぶしを突き合わせることによってよりお互いの心を接近させ、二人の間には感化院の「仲間」とは違う、特に深い友情でつながった仲間意識が芽生えていった。

閉ざされた村の中という限定された空間ではあったものの「僕ら」はその中で好きなように生活をする自由を手に入れた。しかし最初のうち「僕ら」は自分で何をするか考えて生活することを「おっくう」と感じていた。そんな時、墓を作ることや、母親を亡くし土蔵で一人生活していた少女に雑炊を持っていくことは、することを見つけたという安心感を与えたのであろう。そして、そんな安心感も手伝ってか、李少年との深い友情が、そして少女とは愛情が芽生えることとなる。ここで、共食という行為が連帯の意識を高めるといふ本田和子氏の説をあげておきたい。「僕」と少女と「弟」の間には、一緒に食事をするという行為を通じて家族のような連帯の意識が生まれていたのであるか。そして少女との愛は、雑炊を作っただけでなく、少女のために命がけで村を出て医者のところへ行くことを通じて二人の距離が縮まり、性的にも結ばれることで、二人の愛は高められていく。

このようにして、「僕」は他の仲間たちが持っていないもの、すなわち自分を唯一の存在として慕い、自分も守るべ

き存在であると感じている「弟」、反発しながらも信頼関係でつながった友人の李少年、そして性的なつながりを持った恋人の少女を手に入れ、特殊な存在となったのである。集団の中の一要素に過ぎなかった「僕」が、「弟」の出現で得た血縁のつながりの意識の獲得により変化し始め「弟」の目を通して「僕」というただ一人の存在として意識されるようになり、李少年との仲間意識や少女との愛情の獲得は、更にその意識を強固なものにし、「僕」は確実に成長を遂げていくのである。

第七章の「獵と雪のなかの祭り」の中に描かれている李少年の提案によって行われた村での「祭り」の風景の中で、そんな「僕」を象徴している場面がある。

僕はレオをつれて雪の中へ走り戻って行く弟たちを見おくりながら、火の傍に残って兵士のように膝をかかえた。李と南も火から離れようとしなかった。僕ら三人はもう、あまり子供ではないというわけだった。(第八章)

この場面で効果的に用いられているのが「火」である。河合隼雄氏の説によると、ギリシャ神話のプロメテイウスの物語の中で、人間に火を与えなかつたゼウスからプロメテイウスが火を盗み出し地上に持って帰ってくることで、人間は火を使うことができるようになった。このときのプロメテイウスの盗みを自立のための行動と考えると、火は人類の自我の象徴なのだ^①と考えることができる。自我が意識されていない子供の心を暗闇と考えると、自我の目覚めとはそこを照らす炎が燃え始めたと考えられるのである。「僕」や脱走兵たちが炎のそばから離れないということは、すなわち「僕」の中に意識され始めた自我の炎が心の中で燃え始めたことをここでは象徴しているように思われる。

本来の姿であれば、血縁関係を持つ人間と暮らしているはずの子供たち。そしてその後社会に出て友情や愛情を獲得し成長していくのであろう。しかし、この感化院の子供たちの特殊な仲間意識、すなわち友情や愛情を伴わない自分の身を危険から守るための羊の群れのような仲間意識に慣れきった子供たちを描くことで、この作品は、家族との

つながり、友人や恋人との心のつながりがいかに子供を自立に向かわせるために必要かということを示している。当たり前に存在するものを無い状態にする、そんな作者の意図が隠されていると思われる。

三

次に僕に訪れた大きな変化。それは別れによって獲得した仲間意識や愛情を失うということである。最初の別れは愛を交わした少女との別れである。お互いの気持ちが通じ合った後、「僕」にとって少女は少しずつ非日常の存在から日常の家族のような存在に変わりつつあった。

それから彼女は上衣のあいだから紙包みを取り出し、その中にしっかりと包みこまれている食物、小麦粉を硬く焼いた石のような食物を二つに引きちぎった。そのやや大きい半分を黙ったまま僕に渡し、少女は残りをまた二つに割るために指に力をこめた。僕は自分の分けまえを二つにして弟にわけると犬に載せていた右手を膝にかえそうとした。(第七章)

このように、一つのを分け合い、共に食べる行為が自然となされるようになっていく。しかしその後、「弟」の飼っている犬のレオが少女の手頸に咬みつくという事件が起こる。そして、その後「僕」は少女を疫病という自分の力ではどうしようもないものに突然奪われてしまう。このことには大きな悲しみはつきまとうものの、「僕」のせいではない。むしろ「僕」にできることは、最大限行ったといっても良いであろう。「僕」は少女の命令に従順に従い、火をおこしたり、足をこすって暖めたりということをしているからである。

少女との別れはこれから始まる様々な別れの序曲にすぎない。「僕」に最も大きな影響を与えたのは、次に訪れた

「弟」との別れである。「弟」の愛犬レオに咬みつかれ、しばらくして病気になった少女は、その症状から疫病ではないかという疑いが持たれる。レオが疫病に感染していたから、咬まれた少女も疫病になったのだと考えた子供たちによってレオは殴り殺され、助けようとする「弟」の哀願する目を「僕」は無視してしまう。その後「弟」は一人「僕」のもとから去り、崖から落ちて死んだと考えられる。「弟」はその性質から怒りを直接ぶつけることをせず、姿を消してしまう。子供の成長する過程において、怒りをぶつけるということは重要なことである。自我が芽生えた人間同士は、必ずぶつかり合うときが訪れる。あるいは、何らかのルールが存在する社会の中において、人間と人間がぶつかり合うことは必然であろう。そのぶつかり合いの中で個性が現れてくるのであるし、より良いものが見つかっていくのである。「僕」は最終章で村長に対し強い反発を覚え、怒りを真正面からぶつけている。だからこそ「僕」は自立を遂げ、一人自由を手に入れるのであり、それをしなかった「弟」は、それ以上作品の中において成長できない、消える存在となるのである。その意味で「僕」と「弟」とは対照的な登場人物であるといえよう。

「弟」の存在とは、前述したように「僕」の持っていない純粋な美しさを持った存在である。そして、「僕」の成長のきっかけを与え、共に行動してきた人物である。つまり、「僕」の心の中に自立の火を灯したのは「弟」であり、その火がしっかりと燃え始めると「弟」は姿を消す。まるで、そのために使わされた神話の中の天使のようである。だから、役割を終えた「弟」は「僕」にはもう必要無い存在となり、もはや「僕」と「弟」とは一緒に存在することができなくなるのである。

「僕」の心の中に宝物のように大切にしまわれるような美しい存在の少女や「弟」がいなくなってしまうということとは「僕」の心の中にぽっかりと大きな穴が開くということである。その悲しみと寂しさを心にしっかりと刻み込み、乗り越え生きていくということが「僕」の成長には必要なことなのである。人は必ず死ぬということを理解し受け入

れることが、生きていく人間の宿命である。更に「弟」の死は自分のせいだと強く思うことは自分の心を激しく責めることであり、自分自身をより大きくさせることにつながっていくのである。

朝鮮人部落で李少年にかくまわれていた脱走兵が、戻ってきた村人に捕らえられ、殺害されることも、別れの一つに数えられるであろう。「僕」が「弟」と少女を失った悲しみにさいなまれていたとき、同じように不安や悲しみを抱えていた脱走兵と、お互いに慰めあったからである。

最後に李少年との別れがある。村長の行った裁判で、子供たちが次々と村長の側に寝返る中、最後に「僕」と共に反抗続けたのが李少年である。しかし、最後には彼も反抗をやめる決断をする。この結果「僕」は本当に一人になる。何の集団にも属さない孤独の中に陥ることになる。本当の自立とは何者にも従わないことであり、感化院や村での何かに従う生活からは離脱をしなければいけなくなる。すなわち、本当の孤独な状態に陥る必要がある、そのため愛する少女は疫病で死に、「弟」は消え、友情が芽生え始めた脱走兵は殺害され、李少年にも感化院の子供たちにも最後に裏切られ、別れる必要があったのである。

別れを経験することで、「僕」は更に成長し、自立へと進んでいく。「僕」が経験したことは、一般的に青年期と呼ばれる、子供から大人へと向かう中間地点に位置する期間に経験することである。しかし、作品の中に存在するのは大人と子供のみである。その中間は、子供ではないが大人でもない状態であり、作者はこの不安定な子供の心を実にうまく描いている。おそらく大人と子供の境界の存在、両義性を帯びたこの時期特有の人間の心を青年という言葉ではなくもっと自由に表現しかつたのであろう。

また登場人物の子供たちを感化院の院児とし、自然の壁によって囲まれた村の中に入り、そこで外から監視され幽閉された状態を作り、更にその中で自己の内面の成長を描く。この幾重にも重なった壁によって作られた空間の中

で、現実には普通に成長している青年が冒険とロマンに満ちた成長を遂げたように感じられ読者を魅了する。「僕」は実際は青年期特有の不安定な心を持った少年にすぎない。そしてこの作品はその「僕」の大人への成長の物語といえる。しかし、最終章の最後の決断で「僕」の成長に変化が訪れる。「僕」は完全な大人になることを拒否し、新たな道を選ぶのである。それは秩序からはみ出し、悪として、悪の精神を持って生きる道である。

四

ここで、「僕」が悪の部分を押っているということを考えてみたい。悪についてはこの作品の題名の由来となっている⁵⁾、最終章で村長が「僕」に対して言う次のようなせりふの意味を考える上でも重要である。

「いいかお前のような奴は、子供の時分に絞めころしたほうがいいんだ。出来ぞこないは小さいときにひねりつぶす。俺たちは百姓だ、悪い芽は始めにむしりとりてしまおう」(第十章)

今までのストーリーを悪という観点から捉えなおすことで、「僕」の成長と、最終章のせりふの悪について考えていきたいと思う。中村雄二郎『術語集Ⅱ』によれば、「悪」は、次のように定義される。⁶⁾

- ① 存在の欠如(善の欠如)
- ② 我々の存在の保持を妨げるもの
- ③ 一つの関係(秩序)を解体するもの

まず、①は西洋の伝統的な考え方に基づいている。世の中のものには神が創り出したものであり、すべては善のものである。それが無いという状態がすなわち悪なのである。例えば道徳心や倫理観の欠如などというものがあげられる。

次に②は、善とは我々の存在の保持に役立つものという考え方に基づいている。これは自他との相互関係の中で重要なものである。最後に③は、一つの関係を解体するということは、その結果もう一つの関係を生み出すという考えを含んでいる。例えば江戸時代の悪党のように、古い秩序には従わず破壊することで現状を打破していく人々の例を挙げるができる。このような悪のエネルギーによって関係はより良いものに進化していき、悪のエネルギーは善のエネルギーに変容することもある。

では、作品の中の悪をとり上げてみたい。村人たちにおいての悪とは、罪を犯したという道徳心の欠如を意味する行為をした感化院の子供たちと、兵隊となって国のために戦うことが当時の道徳観の中では善とされていた行為から逃げ出した脱走兵であろう。また、感化院の子供たちは、村人たちが逃げ出した村の中で、家を占拠したり食べ物や家財道具を物色したり、建物を焼いたりする。そのことも村人の道徳心に反する行為であり、悪とみなされる根拠である(①に該当)。次に、自分たちの命を脅かす疫病の存在、更には疫病に感染した人間たちである(②に該当)。そして、村人が子供たちを置き去りにして逃げたことを黙っているようにという村人の要請に抵抗し続けた「僕」。疫病が流行ると村を出て疫病の威力がおさまった頃を見はからって帰ってくるということは、村では古くからされていた習慣であり、村の秩序といえる。たとえそのせいで疫病患者を見捨てることになったとしても、村の秩序となったことに反対をする者は村には存在しない。村で生活をするものにとっては従わざるを得ないことである。その秩序に「僕」はたった一人で反抗する。これは、「僕」が自我をしっかりりと確立し、自らの考えによって決断する心を持ち始めたことを意味する。そしてこのことは、村人にとっては村の秩序を乱す悪であり、新しいものを作り出すという力を秘めた悪なのである(③に該当)。

次に、感化院の子供たちにとっての悪は、自分たちの命を脅かすものとしての疫病である。そして、疫病の感染源

であるかもしれない犬のレオである(②に該当)。最後に一人、村人に抵抗を示した「僕」も、子供たちにとっては悪とみなすことができるであろう(③に該当)。力関係だけで成り立っていると考えられる子供たちの世界においてのルールとは、力のあるものに従うということである。それは一人ぼっちで感化院で暮らす子供たちが、力のあるものに従うことで自分の身を守り、安心感を得るための生きる知恵であろう。そのルールに「僕」はただ一人反抗したのであり、子供たちの中でも「僕」は生きていくことができなくなっていく。子供たちは最初は村人の傲慢な態度に反抗をするものの、力の強いものに従うことが子供たちの中でのルールである限り、結局は子供たちにとって村人は悪にはなりえないのである。

「弟」にとつての悪は、まさに感化院の子供たちと「僕」であろう。「弟」はその純粋な心から、人を憎むといったことは関係ない存在である。しかし、「弟」が、唯一自分が守るべき存在として慈しんでいた犬のレオが撲殺されたとき、その撲殺を実行した子供たちやその行動を見ていた子供たち、更にはその行動を止めなかった「僕」や李少年に対して初めて怒りをあらわにする。

「止して」と弟が恐怖にかられて叫んだ。「僕のレオを殴ると承知しないぞ」

(中略) 僕は弟が僕に哀願する眼をむけるのを見たが、どうすることができよう、犬は長く舌をはいて不器用に立ち、それが僕にはすさまじく繁殖する病菌の塊りのようにさえ見えて来るのだ。「李先生」と弟が叫び、李は身動きもしなかった。

(中略) 彼は怒りと哀しみにうちのめされ、かきたてられていった。

「レオが疫病だと、誰に判るんだ？ ああ、お前たち、誰に判るんだ」(第八章)

このように、「弟」の強い怒りと悲しみが描かれている。そしてこの後「弟」は一人で家を出て森の中に姿を消す。

最後に「僕」にとつての悪である。ほかの子供たちと同じように、自分の生命を脅かす疫病は悪である(②に該当)。自分のみならず、自分が愛した少女を奪ったことも悪の要因である。そして、何より大きな悪は村人である。彼らは「僕」を始め感化院の子供たちを「はめ込もう」とする。つまり、自分たちが村に子供たちを置き去りにしたことを黙っているかわりに、食べ物を与え、彼らが村の中でしたことを水に流そうというのである。子供たちの秩序の中には力のあるものに従うことは正しいことであるから、子供たちはそれに従うが、秩序を破る存在となった「僕」にとつて、村人たちが子供たちを丸め込もうとすることは何よりの悪である。その「僕」自身は村人や仲間であつたはずの子供たちからは悪とみなされるのであるが。

そして、もう一つの悪は、自分自身であろう。「僕」は弟の失踪は自分のせいだと考え、自分の不甲斐無さから「弟」に見捨てられたと考える。

僕は自分が弟を裏切つたと考えた。暗い穀物倉庫の埃くさい藁に顔を埋めて泣きながら寝込む弟を僕はどうやって慰めればいいのかろう。(第八章)

僕は弟から見捨てられたのだと考えた。(第八章)

最初は「僕」が「弟」を裏切つたという罪の意識がある。「僕」は慰めてあげべきだったのにそうしなかった自分の行動を後悔している。しかしその意識はやがて自分を責める気持ちに変わり、こんな自分だから「弟」に見捨てられたのだと、自分を追い込み孤独な感情をつのらせていく。

悪という視点からみると、村人と感化院の子供たちは近い価値観を持っていることがわかる。だからこそ、子供たちは「僕」を裏切り村人側につくのである。このように、悪と言っても単に大人が悪で子供が善とは言い切れないところが、作品空間の面白さに加えて、この作品の奥深いところになっているのである。②の悪はだれしもに共通する

悪であるが、特に特徴的なのは、③に定義された悪である。この悪は最初の頃の「僕」は持っておらず、自立への成長の過程の中から生じてきたものである。自立とは他人の従属から離れてひとり立ちすることである。他人の従属とはすなわち感化院の中においては教官や年上の者といった力のある者に従うことであり、村においては村人や村長に従うことである。その従属から離れようとするのが自立であり、それは今まで述べてきたように村での自由な生活とその中で得た様々な経験によって「僕」が成長を遂げたからにはかならない。その結果、「僕」は他人に左右されない自ら決断し行動する強い精神を獲得しつつある。これがまさに悪となる要因であり、「僕」は悪の精神を獲得しつつあると言うことができる。

最初、村長が子供たちに自分たちのしたことを黙っているようにと言ったとき、子供たちは皆その言葉に敏感に権力においてを嗅ぎ取り反抗を示す。

僕の仲間たちはみんなが村長への硬く対抗する態度、しっかりとした姿勢を取り戻した。僕らはうまくはめこまれようとしていたのだ。(中略)僕ら仲間たちはすっかり態勢を挽回し、内部の同志としての固い結束をとり戻し、村長に対して挑戦的に胸をはり眼をきらきらさせていた。(第十章)

このように、再び「僕ら」「仲間」という語が使われ、子供たちは一致団結して村長へ反抗している。しかし、子供たちは力のあるものには従うため、その反抗は長くは続かず、村長の方につくことで団結力を見せることとなる。村の考えに従うものは食べ物を与えるからその場を立てと言う村長の命令に次々に子供たちは従い、南と李少年も最後に立ち、「僕」一人がその場に残ることとなる。

僕の仲間たちは、それをむさぼり食いながら頑なに僕へ背をむけ、明らかに僕へ恥じていた。しかし僕自身は、自分に対して自分の口腔に湧く唾、収縮する胃、そして牀の隅ずみまで血を乾かせる飢えを恥じていた。(第十

章)

ここからわかるように、「僕」も他の子供たちと同じように飢えを感じ、食べ物を手に入れたいという欲求にかられている。しかし、「僕」はその心と戦って自分の心を恥と感じ、最後まで抵抗を続ける。これは自分の心を律する強い心を持ちつつあることの表れであろう。そして、このような「僕」の頑なな態度は村長をはじめ村の人々にも、かつては仲間であった感化院の子供たちにとっても秩序を乱す悪となってしまうたのである。

悪とは秩序を守る人から嫌われるものである。しかし、その力によって古い秩序は壊され進化し、今の人間が存在するとも考えられる。個人の内面の問題として考えるならば、心の中に悪と呼ぶべきものが生じ、そのエネルギーによって自立していくのである。そうしたとき、悪は善へと変容する。悪にはこのような二面性がある。「僕」にとっては善に変容した自立の生命力の表れとも言うべき悪は、村長には「悪い芽」と呼ばれ、むしりとられようとするのである。

このように村人や子供たちの悪と「僕」の悪とは決定的に違っている。それは単に「僕」が大人になったからという理由だけでは片付けられない。むしろ「僕」は村人のような大人になることを拒否している。「僕」は悪の精神、すなわち村の秩序や子供たちの中のルールに従わず、自分で考え決断し行動するという強い精神が芽生え始めたからなのである。そして、大江健三郎の言葉で言うところの「自立した精神」がこれなのである。

「僕」の心の中に芽生えたこの精神が、村人のような大人になることを拒絶させ、最後の決断へと向かわせるのである。

最後に、「自立した精神」ということについて考えたい。大江健三郎はこの言葉に独自の考えを加えているように思われる。「自立した精神を感じとることは人間の尊厳を考えるきっかけとなる」彼は講演会でこう話している。この自律した精神と共鳴関係にあるものが *upstanding man* であるとも言っている。この言葉はイエイツの「塔」という詩の中に出てくる言葉^⑩で、直訳すると直立したとか高潔なといった意味である。国家的な道徳や倫理観ではなく個人のそれに従って生きることが人間の尊厳を考えるうえで大切であり、そういった人間の心は自立した精神によって支えられている。これは現在の大江氏の考え方であるが、「ドストエフスキーのような人間の尊厳を描くために小説家になった」と言っていることから、『芽むしり仔撃ち』の根底を流れている考え方と共通する点が見られるのではなからうか。大江氏の中には初期の頃から人間の尊厳を描きたいという考えがあった。閉ざされた空間の中で束縛されて生きる子供たち、すなわち人間の尊厳の無い状態を描き、底から一人の少年が成長する過程を通して強い精神を手に入れる。その精神は、秩序の中では悪とみなされ、むしりとられそうになるものの、なんとかそこから脱出し、自由を手に入れるということが、この作品で描かれている人間の尊厳である。そのためこの作品の主人公は第二の誕生といわれる、まだ自我を獲得していない青年期の人間であり、また人間としての生命力に満ちた、悪と呼ばれても屈しない、非行少年で無ければいけなかった。成長過程を通して自立に向かい、自立した精神の芽生えを表現することで、人間の尊厳を考えるきっかけを与えているのがこの作品であり、作品のテーマであると考えられる。

このように、大江健三郎が言う「自立した精神」とはすなわち、自ら考え決断し行動する強い心である。そしてこ

のような精神が作品の中においては悪の精神となって表れるのである。大江健三郎も「非行の時のエネルギー」を大切なものであると肯定的な見方をしている^①。非行とは秩序に反発する心であり、その意味では悪の精神である。そしてこの心に従って、何者にも従属せず縛られない人間に変化を遂げることで「僕」の悪の精神が善の力へと変容するのである。その姿は青年と発言言葉では言い表せない、大人と子供の両方の要素を兼ね備えた、神話的な人間の誕生である。純粹な心の美しさを核にして、強い決断力や行動力で戦う人間。そんな姿を「僕」のその後として想像できる。

大江氏が「この小説はぼくにとっていちばん幸福な作品だったと思う。」と語るにいたる理由も、この「僕」の成長が成功したからではないであろうか。そしてこの精神の獲得とそれを持って生きるという人間の尊嚴のテーマは現在に至るまで表現方法や題材を変えながら、脈々と息づいているのである。この作品は、その意味で大江健三郎の原点とも言うべき作品である。

『芽むしり仔撃ち』は当時の若者にとっても、そして今の若者にとっても、時代を越え語りかけてくる。

大人になりつつある君たち、君たちは本当に自由なのか。君たちが目指す大人とはどんなものなのか。さあ、自立した強い精神を獲得し生きるため、歩み出そうではないか。

- (1) 藪田澄『フォト・エッセイ 子供の領分』（淡交社、一九九六・五）を参照した。
- (2) 桑原丈和は『大江健三郎「芽むしり仔撃ち」論——「自己」のために戦いを選んだ「僕」——』（『国語国文研究』北海道大学国文学会、一九九二・二）の中で「僕」は第一に弟との関係において「僕」なのである。」と述べている。
- (3) 本田和子『若者と子供の文化』（財団法人放送大学教育振興会、一九九三・三）を参照した。
- (4) 河合隼雄『今ここに生きる子ども 子どもと悪』（岩波文庫、一九九七・五）を参照した。
- (5) 平野謙が『芽むしり仔撃ち』（新潮文庫、一九六五・五）の「解説」で指摘している。
- (6) 中村雄二郎『術語集Ⅱ』（岩波新書、一九九七・七）。
- (7) 利沢行夫は「戦後の文学の「遺産」——大江健三郎の二重性」（『群像』一九七五・三）の中に「彼らの間にあったものは、本当は力関係だけ」と述べている。
- (8) 日本国語大辞典第二版編集委員会『日本国語大辞典第二版 第七巻』（小学館、二〇〇一・七、第2版第一刷、第一版は一九七二・一二）
- (9) 文学フォーラム名古屋（主催：読売新聞社、NHK、南山大学、二〇〇二・十一・七）における大江健三郎の講演「自立した精神とモラリティの再建——人間の尊厳のために」における話をもとにしている。
- (10) W・B・イエイツ『イエイツ詩集』（尾島庄太郎訳、北星堂、昭和41・8、第3版、初版は昭和33・1）
- (11) 大江健三郎『厳肅な綱渡り 全エッセイ集』（文藝春秋新社、昭和40・3）の中の「少年たちの非行のエネルギーは抹消されるべきものか?——少年非行問題」を参照した。
- (12) 大江健三郎「わが小説——『芽むしり仔撃ち』（『朝日新聞』一九六二・三・九）。

参考文献一覧表

『芽むしり仔撃ち』論

- * 蘭田澄『フォト・エッセイ 子どもの領分』（淡交社、一九九六・五）
- * 桑原文和『大江健三郎『芽むしり仔撃ち』論——〈自己〉のために戦いを選んだ「僕」——』（『国語国文研究』北海道大
学国文学会、一九九二・一二）
- * 本田和子『若者と子どもの文化』（財団法人放送大学教育振興会、一九九三・三）
- * 河合隼雄『今ここに生きる子ども 子どもと悪』（岩波文庫、一九九七・五）
- * 松原新一『大江健三郎の世界』（講談社、一九六七・一〇）
- * 中村雄二郎『術語集Ⅱ』（岩波新書、一九九七・七）
- * 『日本国語大辞典 第二版 第七卷』（小学館、二〇〇一・七）
- * 黒古一夫『大江健三郎論——森の思想と生き方の原理』（彩流社、一九八九・八）
- * 大原茂『大江健三郎文学事典』（スタジオVIC、一九八四・八）
- * 片岡啓治『大江健三郎論——精神の地獄をゆく者——』（立風書房、一九七三・七）
- * 岩田英作『芽むしり仔撃ち』論——「僕」像の修正をめざして——』（『近代文学試論』広島大学近代文学研究会、一九八
九・一二）
- * 栗坪良樹『作品と評価史 芽むしり仔撃ち』（『国文学 解釈と教材の研究』学燈社、一九八三・六）
- * 小沢信博『芽むしり仔撃ち』までの大江健三郎』（『日本文芸論集』東北大学文学部国文学研究室、一九八四・三）
- * 磯貝英夫『芽むしり仔撃ち』（『国文学解釈と教材の研究』学燈社、一九七一・一）
- * 平野謙『平野謙全集第10卷』（新潮社、一九七五・九）

- * 石橋紀俊「大江健三郎『芽むしり仔撃ち』論——生成する記憶——」(『日本アジア言語文化研究』大阪教育大学教養学科 日本アジア言語文化コース、一九九九・三)
- * 大江健三郎「私という小説家の作り方」(新潮社、二〇〇一・四)
- * 大江健三郎・大江ゆかり『自分の木』の下で』(朝日新聞社、二〇〇一・一二)
- * 大江健三郎『厳粛な綱渡り 全エッセイ集』(文藝春秋新社、一九六五・三)
- * 利沢行夫「戦後文学の「遺産」——大江健三郎の二重性」(『群像』講談社、一九七五・三)
- * 板倉正「大江健三郎論——『芽むしり仔撃ち』の位置」(『日本文学研究』大東文化大学研究会、一九八五)
- * 福島章「青年期の心——精神医学から見た若者」(講談社現代新書、一九九四・五)
- * 鈴木康平・松田惺『現代青年心理学「新版」』(有斐閣ブックス、一九九七・一〇)
- * 大江健三郎『NHKビデオ 大江健三郎文学入門第8巻 小説のなかの子供』(丸善、一九九五)
- * W・B・イエイツ『イエイツ詩集』(尾島庄太郎訳、北星堂、昭和41・8)
- * 大江健三郎「わが小説——『芽むしり仔撃ち』」(『朝日新聞』一九六二・三・九)
- * 鶴見俊輔・安野光雅・森毅・井上ひさし・池内紀『悪の哲学へちくま哲学の森』(筑摩書房、一九九〇・三)